私のネクストステージ
—退職者への質問状— Vol.28

異なる世代・異なる国々への理解を深める日々の中で

元会社員
栗本 和昭さん（68歳）
2015年6月最終退職

【くりもと・かずあき】1949年生まれ、岐阜市出身。高校卒業後、上京。都内の大学卒業後、1973年東京に本社を置くタイヤメーカーに就職。主に営業と企画・渉外業務を担当。営業活動では日本全国を回り、欧州駐在時には同域内の20数ヵ国に出張。2015年に同社を退職した後は、大学の聴講生として学生生活を楽しんでいる。趣味は、絵画とクラシック音楽の鑑賞及び旅行。

——退職後のライフプランは、何歳くらいの時からどのように描かれていましたか。

60歳で定年を迎え、その後6年間弱再雇用で働いていた期間に、「退職後は、ある程度テーマを絞った勉強がしたいな」と漠然と考えていました。

——定年前はどのような部署に所属し、どのようなお仕事を担当されていましたか。

経営企画部に所属し、主に海外企業との交渉や国際会議等に出席するなど、特命業務や経営トップの補佐を担当しました。

——再雇用で働かれていた時は、どのようなお仕事を週何日されていましたか。

法務部で、中長期計画策定と法務体制の拡充支援、若手部員の指導業務等を、週3日間の勤務で行っていました。

——いざ退職を迎えられた時、どのような思いを抱かれましたか。

「今後は自由時間が相当ある」という喜びは大きかったのですが、それも当初の数週間だけで、そのうち「今日やらなくても明日がある」というような、前向きな気持ちが失われつつある事に気づきました。

また在職時代の余暇は貴重だったため、限られた時間をいかに有効活用するかを考え実行していくという充実感がありましたが、退職後は何をやっても以前程の充実感が得られないような気がしました。

——遠方で暮らすお母様の介助のため、月に一度帰省されているそうですが、その際はどのような介助をなさっていますか。

母は3年程前まで岐阜の実家で一人暮らしをしていましたが、90歳を過ぎた頃からそれが無理となり、近くの高齢者向け施設に入居しました。初めての集団生活は結構ストレスが生じるようなので、帰省した数日間は終日一緒に過ごし、グチを聞いたり、昔話をしたり、買物の代行をしたり、好天時には近所に車椅子で一緒に出かけるという程度の介助に過ぎません。

少し大変なのは、四季折々に実家と施設を往復し、母の衣類等の入替えをする事ですね。

——遠方のご家族の介助をされている方にアドバイスがあったら教えて下さい。

介助を義務と思わず、異なる年齢層との交流を図る事で自分の経験を広げられたと、前向きに考えれば良いと思います。

また自分のルーツ（先祖の話や親の昔話を聞き）を知る機会が得られる事もあります。とはいえ双方が気疲れする場合もあるので、介助の合間にちょっと故郷の旧友や恩師に会ってくると気分転換になりますよ。

——介助をするようになり、物の考え方や感じ方で変わった事はありますか。

私自身も間もなく「老い」に直面します。高齢者にとって、少し若かった時にはできた事も徐々にできなくなるのは大きなストレスのようですが、考え方次第（今できる事に自信を持つ）で、苛立ちも軽減すると

感じました。
　また孤独感については、たとえ家族と頻繁に会えずとも、日頃からお互いが思いやっていれば、心安らかな日々を過ごせると思えるようになりました。

――お母様の介助のかたわら、大学で聴講もされているそうですが、何故また学ぼうと考えられたのですか。

時にはジムでリフレッシュ！

介助は異なる年齢層との交流が図れる時間

世代ギャップを刺激にしながら、複雑な国際問題について考える

　正確に言うと、大学通学の合間に、母の介助に帰省しているだけです。
「学びたい（＝単なる好奇心）」という気持ちは、社会人を経験し、物事に対する見方が、自分がまだ若かった学生時代とは異なってきた中で、専門家の最新の研究に基づいた見解を知りたいという、単純な動機から生じました。興味のある分野につき、書籍から知識を得る事も可能ですが、受講の方が学びの広がりを実感できます。

――大学ではどんな勉強をされていますか。

　主に「国際関係学」（国々の相互理解を深め、平和な関係を目指す学問）を学ぶため、政治学・歴史学等関連分野の授業を受け、複雑な国際問題（特に外交・安全保障分野）を分析するための基礎を勉強しています。

――どのくらいの頻度で通われていますか。若い学生たちと共に学ぶ事に対しては、どう感じていらっしゃいますか。

　原則、週3日間通学しています。
　キャンパス内で若い学生と一緒になりますが、みんな溌剌（はつらつ）としていて気持ちが良いですね。シニア聴講生に対する態度は親切ですし、言葉遣いも丁寧で感心します。
　ただ例えば現代史の授業では、冷戦の終結・湾岸戦争等の出来事は、私達の世代は実際にメディアで見聞きした訳ですが、今の学生はまだ生まれる前の出来事なので、完全に「歴史」な訳です。そのような世代ギャップは大きいので、それぞれの見解が異なる事は多々あり、こうした違いを知る事も新鮮ですね。

――ご家族・ご友人は大学に通われる事に対して、何とおっしゃっていますか。

　家族は好意的ですが、友人の多くは「今更勉強して何か役に立つの？」という疑問を呈します。確かに私が学んでいるのは実学ではないので、すぐに実生活で役立つ訳ではありませんが、知的好奇心は満たしてくれますね。

――今後やりたい事はありますか。

　国際問題について意見交換できるサークル等に参加し、議論を通じ見識を深めたいですね。
　また外国を訪れ見聞を広めたいのですが、母が入居する施設の運営者から、入居者の家族は極力国内不在にならないようにとの要請もあり、実現は先になると思います。

――最後に、現役世代の方にメッセージをお願いします。

　目先の仕事も大切ですが、日本の社会や世界情勢をより良いものにするため、まずは国内外の動きに目を向けて、自分は何が問題と思うか、各自でどんな対応ができるのか考える習慣をつけることを期待しています。それと人々との間での直接的な会話を多くし、様々な交流を持つよう、心がけて欲しいですね。

――お話頂き、ありがとうございました。